

[調査報告] チェスター・ビーティー新約聖書写本

伊藤明生

(東京基督教大学大学院教授)

チェスター・ビーティー図書館は、アイルランド共和国の首都ダブリンにあるダブリン城の敷地内に現在ある。故アルフレッド・チェスター・ビーティー卿が生前蒐集した品々が、館内に保管・展示されている。蒐集品の陳列というと、図書館というよりも博物館のイメージに近いかもしれないが、蒐集品の中心が写本を含めた書籍類が大多数なので図書館と呼ぶのかもしれない。

アルフレッド・チェスター・ビーティーは、1875年に米国ニューヨークで三人兄弟の末っ子として生まれ、鉱山業、とりわけ金鉱採掘で成功して一代で巨万の富を築いた。家庭の不幸、そして自らも健康を害した後に、米国から英国ロンドンに居を移している。子供の時分から蒐集癖があったが、私財をなげうって蒐集した品々は多岐に渡る。とりわけ1914年にエジプトを訪れてコーランの写本を購入したり、1917年にアジアを旅行してからは中国や日本の絵画なども蒐集したりするようになり、蒐集品はさらに多様化して膨大なものになった。第二次世界大戦後、蒐集した品々は当時居住していたロンドンからアイルランドのダブリンに移され、最終的にアイルランド共和国に寄贈された。蒐集品を保管・展示するチェスター・ビーティー図書館は1954年に開館した。チェスター・ビーティーは1957年に名誉アイルランド市民第一号となる栄誉に輝き、1968年に死去した際には盛大な葬儀が執り行われた。

チェスター・ビーティー図書館所蔵の品々には、聖書の主要なパピルス写本が12含まれている。そして、その12ある聖書の写本のうちに¹、初期の新約聖書の写本として有名なパピルス写本が三つある。チェスター・ビーティー図書館の目録では聖書パピルス (Chester Beatty Library Biblical Papyrus) 1番、2番、3番で、新約聖書の写本としてはパピルス45番、46番、47番として知られている。

本稿では、2016年7月12日から21日にかけてチェスター・ビーティー図書館

1 「聖書のパピルス写本」という際には旧約聖書のギリシア語訳写本も含まれる。因みに、チェスター・ビーティー図書館所蔵聖書パピルス19番は、パピルス66番(ボドメールパピルス2番)の小さな断片(ヨハネ福音書19章25節と31節)である。

を訪れて聖書パピルス1番、2番、3番を実見調査することが許され、その際の調査報告を行いたい²。既に本誌第25号(2015年)でパピルス46番、第26号(2016年)でパピルス45番を取り挙げている。内容が重複しないように、パピルス45番と46番については専ら二つのパピルス写本の大きさや構造を中心にして本稿では報告することにする。そして、最後の部分では、パピルス47番についての調査報告を行う。

パピルス45番

オーストリア国立図書館(ウィーン)に所蔵されているマタイ福音書の断片(Pap. Vindob. Graec. 31974)³を除くと、パピルス45番の現存する部分は、すべてチェスター・ビーティー図書館に所蔵されている。その数は30葉⁴(60頁)であるが、当初は100葉(200頁)を超え、四福音書と使徒の働き全部を収めた写本であったと思われる。現存する30葉は、どれも不完全な断片である。もっとも大きな断片は、11葉⁵と12葉が繋がった断片で、ルカ福音書10章6節から11章46節の本文が収められている(82頁・図1参照)。横38cm×縦16-17cmの大きさがある。この一番大きな断片も不完全な断片で、下方は、本文の7-8行程度が失われている。二つの葉が繋がっているため、その繋がっている内側の欄外余白が、ほぼ2cm+2cmであることが確認できる。どの程度の余白部分を外側や上下の欄外に想定するか判断は容易ではない。仮に、上下各々3cm強、左右各々2cmと想定して、欠損部分を補うと、1頁の大きさは、ほぼ横20cm×縦25cmであったことになる⁶。そして、本文部分は、ほぼ横16cm×縦19cmの大きさで、39行であったと想定できる。

11葉と12葉以外にも、13葉と14葉(82頁・図2)、そして16葉と17葉とが

2 今回の実見調査は、2016年度共立基督教研究所研究助成のお陰で可能となった。研究所の研究助成に心から感謝したい。また、チェスター・ビーティー図書館のスタッフの方々にも、たいへんお世話になり、ここに感謝の気持ちを表したい。

3 「パピルス45番—最古の福音書集+使徒の働き」(『キリストと世界』第26号、2016年3月)112頁の写真を参照のこと。

4 英語 folio の訳語として用いるが、意味は「枚」と同義である。コーデックス(綴じ本)では、巻物と異なり、表と裏の両面を使用するので、「頁」数は「葉」数の倍になる。

5 パピルス45番の場合には、現存する30葉に通し番号を付けて、「～」葉と呼ぶ習慣のようである。

6 Eric G. Turner のパピルス本の分類では、グループ4になる(*The Typology of the Early Codex* [repr. ed.; Eugene: Wipf and Stock, 2010], 16)。

繋がった状態で現存する⁷。13葉と14葉には、ルカ福音書11章50節から13章24節が、16葉と17葉にはヨハネ福音書10章7節から11章57節までが、それぞれ収められている。以上の二葉が繋がった状態のものを開いた状態にすると、左右の頁でパピルスの繊維の方向が同じ横方向であることが、パピルス45番のコーデックスの構造を理解する上で、重要な情報である。パピルス紙は繊維が垂直に交差するように重ね合わせて製造するため、表 (recto) と裏 (verso) とで繊維の方向が異なる。表の繊維の方向が横で、裏の繊維の方向は縦である⁸。11葉と12葉の繊維が横向きの面で頁の内容が繋がるので、そちらの面を内側に、繊維の向きが縦の面を外側にして二つ折りになっていたことになる。繊維の方向が縦・横・横・縦と頁が繋がることになる。矢印で表記すると、↓→→↓となる。13葉と14葉、16葉と17葉も同じように、繊維が横方向である面を内側にして二つ折りにして、↓→→↓という一帖 (quire) を構成している。つまり、2頁分の大きさのパピルス紙を繊維が横方向の面 (recto) を内側にして二つ折りしたものを50枚以上重ねてパピルス45番のコーデックスが彫作られていたことになる⁹。すると、どこを開いても、開いた左右の頁のパピルスの繊維の方向が同じになる。

二葉続きの内側の欄外余白に、上下に二つ穴が開いている。一枚を二つ折りにして、折った少し内側のところに上下二つ穴を開けて紐を通して綴じたものと思われる。パピルス紙でコーデックスを作成する際には、コーデックスの大きさに合ったパピルス紙を製造したり、入手したりしてコーデックスを作成するのではなく、巻物状態になったパピルスを手入して、その巻物を裁断してコーデックスを作成することが多かったようである。現代的感覚からすると、非効率で不経済なことと思われるが、パピルス紙を繋げて作成した巻物を手入して、適宜裁断してコーデックスを作成した。その結果、多くのコーデックスには、あちらこちらにパピルス紙とパピルス紙の繋ぎ目 (κολλησεις) を見出すことができる¹⁰。例えば、12葉にパピル

7 二葉が繋がっていることは、現物を見るまで気が付かなかった。Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri: Descriptions and Texts of Twelve Manuscripts on Papyrus of the Greek Bible: Fasciculus II The Gospels and Acts* (London: Emery Walker, 1933), v-vii も参照のこと。

8 パピルス紙製の巻物であれば、繊維が横方向の面 (recto) を使用するのが普通で、繊維が縦方向の面 (verso) は再利用の際に使用することになる。

9 このようなコーデックスの構造をターナーは "uniones" と呼んでいる (*The Typology of the Early Codex*, 60-61)

10 Turner, *The Typology*, 46-48.

ス紙とパピルス紙とを繋ぎ合わせたと思しき痕跡を見出すことができる。

写真では確認できなかった頁数は、実見でかろうじて確認することができた。27葉裏 (verso) の上方、中央より心持ち右よりに「193」、30葉の表 (recto) 上方、中央よりも少し右よりに「199」の数字をかろうじて判読することができた¹¹。四福音書と使徒の働きの全部が収められていたことを考慮すると、ほぼ56帖で、頁数にして224頁はあったとスキートは推測する¹²。四福音書が並べられていた順序について、ケニヨンとスキートは、マタイ、ヨハネ、ルカ、マルコという西方伝統に則っていたと考えた¹³が、各頁に頁数も残ってなく、各書の冒頭や末尾の頁も現存しないので、どのような順序で並べられていたか判断する材料はない。今回の実見でも、そのような根拠となる示唆を得ることはできなかった。

パピルス45番の字体は、小さく、明確である。文字の縦と横がほぼ同じで、全体はやや右に傾いて、行そのものも心持ち右上がりであるが、行間も詰まっ

- 確かな腕の写字生が書写したものと思われる¹⁴。文字の小ささからは、朗読には余
- 11 実際にはギリシア文字で表記されている。数字90として、コッパという廃れた文字が使用された。100はロー (ρ)、3はガンマ (Γ)、9はシーター (Θ) であった。例えば、「193」をギリシア文字ではロー、コッパ、ガンマと表記する。
 - 12 Theodore C. Skeat, "A Codicological Analysis of the Chester Beatty Papyrus Codex of Gospels and Acts (P45)" in *The Collected Biblical Writings of Theodore C. Skeat*, ed., James K. Elliott (Leiden: Brill, 2004), 156.
 - 13 Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri II*, viii; Theodore C. Skeat, "A Codicological Analysis of the Chester Beatty Papyrus Codex of Gospels and Acts (P45)", 156.
 - 14 ケニヨンは、パピルス45番の写字生の字体を次のように評価する。"The codex is written throughout in a small and very clear hand. The letters are approximately square in formation, i.e. are about equal in height and width, as opposed to the greater width which is characteristic of Ptolemaic hands, and the greater height characteristic of the Byzantine period. They have, however, a decided slope to the right, as opposed to the uprightness generally found in Roman hands of the first two centuries. Letters such as ε and ς have rounded backs, the tops rather flattened and brought well over. λ is generally composed of two strokes forming an acute angle on the left, and a slightly curved stroke drawn across the opening of the angle. μ is well curved and rather broad. The top stroke of ζ is distinct from the rest of the letter, while the middle stroke, or rather point, is joined to the lower stroke by a curve. ω is well rounded, the central upright lower than the two outer ones. There is no excessive length in γ, φ, and ψ. The other letters have the simple, unexaggerated form which is characteristic of good Roman hands. The writing is very correct, though without

り適していなかったように思われるので、個人の読書用に作成された写本であったかもしれない。

パピルス 46 番

パピルス 46 番は、元来はひとつのパウロ書簡集のパピルス写本であったが、カイロの業者がバラバラの束で何回かに分けて売りに出したために¹⁵、現在はチェスター・ビーティー図書館(Chester Beatty Library Papyrus 2)とミシガン大学(ミシガン大学図書館パピルス目録 6238)の二箇所分割所蔵されている。現存することが確認できている 86 葉中、56 葉がチェスター・ビーティー図書館に¹⁶、30 葉がミシガン大学に所蔵されている。

チェスター・ビーティー図書館所蔵の聖書パピルス写本 2 番の場合も、二葉が繋がった状態の葉がある。先ず 8 葉¹⁷と 97 葉が繋がった状態の小さな断片である。8 葉には、ローマ人への手紙 5 章 17 節から 6 章 14 節までが断片的に判読できる。97 葉には、テサロニケ人への手紙第一 5 章の一部が残っている。

13 葉と 92 葉も繋がっている。13 葉にはローマ人への手紙 9 章 22 節から 10 章 11 節までが収められ、92 葉にはコロサイ人への手紙 2 章 8 節から 3 章 11 節までが収められている。14 葉と 91 葉も繋がっている。14 葉の裏には「26 (κC)」、表には「27 (κZ)」という頁数が上方の欄外余白中央に記載され、ローマ人への手紙 10 章 12 節から 11 章 12 節までが収められている。91 葉の方では頁数が記載されていた部分が欠損したためか見当たらないが、コロサイ人への手紙 1 章 16 節から

calligraphic pretensions, is the work of a competent scribe.” (Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri II*, viii-ix)

15 まとめて一冊で売り出すよりも、バラして売り出した方が、結果的に儲けが増えるという魂胆らしい。

16 パピルス 46 番のうちで、今回の実見調査でチェスター・ビーティー図書館に所蔵されていることが確認できた葉は、8 葉、11 葉、12 葉、13 葉、14 葉、15 葉、29 葉、31 葉、32 葉、33 葉、34 葉、35 葉、36 葉、37 葉、38 葉、39 葉、41 葉、42 葉、43 葉、44 葉、45 葉、46 葉、47 葉、48 葉、49 葉、50 葉、51 葉、52 葉、53 葉、54 葉、55 葉、56 葉、57 葉、58 葉、59 葉、60 葉、61 葉、62 葉、63 葉、64 葉、65 葉、66 葉、67 葉、68 葉、69 葉、86 葉、87 葉、88 葉、89 葉、90 葉、91 葉、92 葉、93 葉、94 葉、97 葉の 55 葉のみである。

17 パピルス 46 番は、後述する通り、頁数が明記され、コーデックスの構造も明確なので、現存しない部分の葉も数えて「～」葉と表記される。

2章7節までが収められている。

15葉と90葉(83頁・図3参照)も繋がっている。15葉の裏には「28 (KH)」、表には「29 (KE)」という頁数が上方の欄外余白中央に認められ、ローマ人への手紙11章13節から33節までが収められている。90葉の表、上方の欄外余白中央に記載されている頁数は、かろうじてギリシア文字の「ロー (100)」と「オミクロン (70)」が判別できるだけで、一の位の数字が記載されていたと思われる箇所は破損して判読できないが、ピリピン人への手紙4章14節以降とコロサイ人への手紙の表題と冒頭が収められている。90葉の裏には、コロサイ人への手紙1章5節から13節までが収められている。

パピルス46番の場合には、かなりの頁に頁数が残っているので、パピルス45番よりもコーデックスの構造は分析しやすい。パピルスの繊維の方向は、交互に縦・横・縦・横となっている。パピルス45番とは異なり、開いた左右の頁で繊維の方向が異なるようになっている。↓→↓→という具合であるが、この順序に繊維の方向が並んでいるのは、52葉までで、その後の53葉以降は、パピルスの繊維が→↓→↓横・縦・横・縦という順序に並んでいる¹⁸。

以上を総合すると、パピルス46番は、2頁分の大きさのパピルス紙を52枚、表を上にして重ねて、パピルス紙52枚をまとめて真ん中で二つ折りにして出来上がったコーデックスであったことが想定できる。このようなコーデックスは、単純な構造の「単一綴じコーデックス (single-quire)」である。構造的に単純であるが、何かと支障があるコーデックスの構造でもある。

単一綴じコーデックスの困るところは、一言で言えば、まとまりにくい点である。数頁の薄い小冊子であれば支障はないにしても、パピルス46番のように200頁に及ぶ場合には、二つ折りにして綴じた部分(頁の内側)に比べると、開く方(つまり頁の外側)は扇のように収まりが悪くなる。その上、真ん中の方の頁の紙が50枚重ねた厚さの分飛び出てしまう。そのために、真ん中の方の頁の出ている部分を切断することが多かった。実際にパピルス46番の場合も、最初や最後の方の頁に比べると、真ん中前後の頁は幅が狭くなっている。完璧な状態で現存する頁がないので、正確な判断は難しいが、最初と最後の端の頁と真ん中前後の頁と比べると、

18 実は、51葉の表と52葉の裏には、頁数を記載する余白部分は失われていないにも拘わらず、頁数が見当たらない。本来ならば、51葉の表に101、52葉の裏に102という頁数が記載されるところであるが、実際には記載がなく、次の52葉の表に101という頁数の記載があり、その後、順次頁数が記載されている。

幅は1cm以上異なっている。

例えば、15葉の場合に、横は15cmを超えて、縦は20cm弱である。90葉では、横は15cm弱で、縦は19cm弱である。ところが、真ん中の52葉、53葉となると幅は13cmを超える程度で、縦は22cmを超えている。パピルス紙そのものの場合、元来は同じ幅であったものが、保存状態が悪くて破損したり、後代の人が切断したりしたことも考えられるので、念のために本文が書き留められている範囲の広さを比べてみる。すると、真ん中あたりの51葉、52葉、53葉では、本文が書き留められている範囲の幅は、ほぼ10cmである。ところが、15葉や90葉で本文が書き留められている範囲の幅は、優に12cmはある。

パピルス紙そのもの場合には、破損の程度によって左右されるので、現存している幅だけでは判断できない。本文が書き留められている範囲の幅は破損とは直接関係ないと思われるので、より確かな情報である。パピルス46番では、作成当初から最初と最後に比べると、真ん中あたりの頁の幅が短かったと思われる。コーデックス作成に使用した当初のパピルス紙の大きさを確定することは、欠損した余白部分の広さをどのように想定するか次第で変わってくるので、大きな困難が伴う。ケニヨン¹⁹は、2頁分の一枚のパピルスの大きさを幅30cm×高さ20cmと想定したので、1頁分は横15cm×縦20cmとなる¹⁹。ターナー²⁰は、15.2/13.5×27/26.5と想定している²⁰。エボホ²¹は、下方の欄外余白の方が上方よりも長いとして、16cm×28cmと想定している²¹。

さらに踏み込んで考えると、写字生は、書写をしてからコーデックスに綴じたか、それとも既にコーデックスになったものに書写したかは興味深い問いである。学者たちは、写字生たちが書写した後に、コーデックスに綴じたと通常、想定する²²。確かに、書写する状況を現実的に考えてみると、コーデックスに綴じる前のバラバラの状態のパピルス紙に書写する方が容易である。もし、そうだとすると、先ほど

19 Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri: Descriptions and Texts of Twelve Manuscripts on Papyrus of the Greek Bible: Fasciculus III Pauline Epistles and Revelation* (London: Emery Walker, 1934), v.

20 Turner, *The Typology of the Early Codex*, 20. グループ8に分類している。

21 Edgar Battad Ebojo, *A Scribe and His Manuscript: An Investigation into the Scribal Habits of Papyrus 46 (P. Chester Beatty II – P. Mich. Inv. 6238)* (unpublished thesis submitted to the University of Birmingham for the degree of Doctor of Philosophy: 2014), 87–109. とすると、ターナーの分類でグループ6になる。

22 Turner, *The Typology of the Early Codex*, 73–74.

の情報は何を示唆するものであろうか。パピルス 46 番の中央の方の頁では、パピルス紙 1 葉の幅が狭くなっているだけでなく、本文を書き留める範囲の幅も狭くなっている。書写する前に中央の方のパピルス紙の飛び出る部分を裁断して幅を狭くしてから書写に取り組んだものと思われる。パピルス紙 52 枚を一端、重ねて二つ折りにして、真ん中あたりの頁の出っ張っている部分を切り落としてから書写した、と想定することが妥当なことと思われる。そして、書写し終えてから、もう一度 52 葉を重ねて、紐を二つの穴に通して綴じたことになる。

パピルス 45 番と比べると、パピルス 46 番の 写生字の字体は読み易い。ひとつには、行間が十分に取ってあって、字体も綺麗である。さらに、各頁の一番上の行の一番左の文字は、どっしりと立派に書き留められているのに比べると、頁の下方に行くにつれて小さくなり、同じ行でも左の方よりも右の方に行くにつれて文字の大きさは小さくなっている²³。

具体的な数値を紹介するならば、パピルス 45 番では、例えば 11 葉表の本文部分の高さは 15cm で、行数 31 行を数えることができる。他の頁は破損状態がひどく余り参考にならない。パピルス 46 番の場合には、15 葉裏 (28 頁) の本文部分の高さは 16cm で、行数にして 21 行を数えることができ、15 葉の表 (29 頁) は、本文部分の高さ 17cm 弱に 22 行の行数がある。50 葉裏 (98 頁) の本文部分の高さは 18.5cm で、行数は 25 行、50 葉表 (99 頁) で本文部分の高さは 19cm で、行数は 25 行、51 葉裏 (100 頁) 本文部分の高さは 18.7cm で、24 行の行数が数えられ、51 葉の表 (頁数が欠落) の本文部分の高さは 19cm に、行数で 25 行、52 葉の裏の本文部分の高さは 19cm に、26 行の行数、52 葉の表の本文部分の高さは 20cm のところに行数は 26 行ある。ところが、89 葉の表 (174 頁) の本文部分の高さは 17.3cm で 25 行の行数を数え、89 葉の裏 (175 頁) の本文部分の高さは 17.7cm のところに、行数は 27 行を数えることができる。以上、パピルス 46 番では、最初に比べると、

23 “The script of the papyrus is in marked contrast to that of the Gospels and Acts MS. It is far more calligraphic in character, a rather large, free, and flowing hand with some pretensions to style and elegance, upright and square in formation, and well spaced out both between the letters and between the lines. Individual letters are not exaggerated. The curves of **e** and **c** are well rounded, the latter having a rather flattened top. **z** is formed continuously. **γ** is rather deeply indented, but not prolonged downward. **m** is rather small, with short first stroke, and deeply curved. In general it may be said that the letters are rather early in style and of good formation of the Roman period.” (Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri III*, ix)

後に行くほど、行間は詰まっていくことが確認できる。それでも、パピルス 45 番の 11 葉表の本文部分の高さに対する行数よりは、行数が少なく、余裕のあるレイアウトであることが確認できる²⁴。

パピルス 46 番は、チェスター・ピーティー図書館とミシガン大学とで分割所蔵されている。両者に収められている書は、収められている順序に従って、次の通りである。ローマ人への手紙、ヘブル人への手紙、コリント人への手紙第一、コリント人への手紙第二、エペソ人への手紙、ガラテヤ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一の 9 書である。8 葉裏にローマ人への手紙 5 章 17 節から始まり、その繋がっている部分である 97 葉裏にテサロニケ人への手紙第一 5 章の一部が認められるのが最後である。ヘブル人への手紙をパウロ書簡に数えるのは、東方教会の伝統である。とはいえ、ローマ人への手紙の次にヘブル人への手紙が置かれることは珍しく、パピルス 46 番の特徴のひとつである。また、ガラテヤ人への手紙の前にエペソ人への手紙が置かれることも余り他に例があることではない。

ほとんどの学者たちは、当初パピルス 46 番には、テサロニケ人への手紙第二までしか収められていなかったと想定している。換言すると、現存しない残り 7 葉にはテモテへの手紙第一と第二、そしてテトスへの手紙の牧会書簡は収められていなかったと考えている。このような見解にジェレミー・ダフは異を唱えた。写字生は徐々に文字を小さくして、さらに数葉のパピルス紙を加えて、牧会書簡までパピルス 46 番に収めたに違いないとダフは論じている²⁵。

52 葉までと 53 葉以降とでは、パピルス紙の繊維の方向の順序が異なることに着目して、パピルス 46 番は、2 頁分の大きさのパピルス紙 52 枚を重ねて、重ねたまま全部を二つ折りにして作成したコーデックスで、52 × 4 頁あると結論付けられている。このコーデックスの頁数は、構造に基づく議論であって、内容とは無関係な議論である。テモテへの手紙第一や第二、さらにはテトスへの手紙もパウロ書簡と認められていたとすると、それらもパウロ書簡集に収めようとするのは当然

24 エボホは、チェスター・ピーティー図書館とミシガン大学の両方に所蔵されている現存するパピルス 46 番全部のパピルスとパピルスの繋ぎ目も詳細に調査して、興味深い報告をしている (Edgar Battad Ebojo, *A Scribe and His Manuscript*, 79-87) が、本稿は、チェスター・ピーティー聖書パピルス 2 番の調査報告に限定しているので、詳細は別の機会に譲りたい。

25 Jeremy Duff, "P46 and the Pastorals: A Misleading Consensus?" *New Testament Studies* 44 (1998), 578-90.

の発想であったかもしれない。そして、写字生が必然性を感じたならば、さらにパピルス紙を追加してまでもパウロ書簡集に含めた可能性は否定できない。他方、写字生は、コーデックスの前半、つまり52葉の表を書写し終える時点でコリント人への手紙第一12章の冒頭を書写し始めている。この調子で書写していくと牧会書簡を含めたパウロ書簡全部を、このコーデックスに書写しきれるかどうか写字生は、この段階で判断できなかったのではあるか。収まり切らないと判断すれば、この段階でパピルス紙を加えて、頁数をふやすことは十分にできた。コーデックスの最後の頁まで書写し終えたけど、パウロ書簡全部を書写し終えていないので、慌てて余分のパピルス紙数枚を付け足すなどという大失態をなぜ演じたのであろうか²⁶。

ジェレミー・ダフの議論には、パピルス46番というコーデックスを純粹に解明しようという意図以上に、牧会書簡のパウロ著者性や正典性を論証することに、より強い関心があるように思われる。しかし、パピルス46番の謎とも呼ぶべき点にダフが着目したことは見落としてはならないと思う。それは、このまま写字生が書写し続けたならば、テサロニケ人への手紙第二を書写し終えた時点で数頁の余白の頁が残りそうなことに気付いたであろうということだ。それにも拘わらず、パピルス46番の写字生は、徐々に文字を小さくし、徐々に行間も詰めている。まるで書写しきれそうにないので、何とかコーデックスに収まるように写字生が努力し始めていたようである²⁷。それにもかかわらず、写字生は、最後の数頁を余白のまま残した²⁸のであろうか。パピルス46番の写字生は、テサロニケ人への手紙第二の後に何かを書写しようとしていた、と自ずと思いたくなる。しかし、写字生が書写した書が牧会書簡で、その部分全部が失われたと想定することができる証拠は今のところ見つかっていない²⁹。

26 ターナーは、書写したい文章が収まるかどうか予め判断しなければならないことがコーデックスの短所のひとつであったと指摘する。巻物の形態の書物の場合には、足らなければ付け足すことは容易にできた。(The Typology, 73)

27 ターナーは、パピルス75番と66番の例を挙げる。パピルス75番では、徐々に文字を小さくして、最終的にルカ福音書とヨハネ福音書の両方を収めることに成功している一方で、パピルス66番では、余白が残りそうなことに気が付いた写字生が徐々に字を大きくしている(Turner, The Typology, 74, 86.)。

28 エボホは、余った数頁を残すことは当時の普通の習慣であった、と言うが、特に根拠は示していない(E. B. Ebojo, A Scribe and His Manuscript, 235)。仮にそうだとしても、写字生が徐々に文字を小さくし、行間を詰めていったことも説明しなければならないだろう。

29 筆者としては、牧会書簡のパウロ著者性や正典性に疑念を抱いている訳ではない。ダフが論じ

パピルス 46 番を巡る謎と呼ぶほど大袈裟なことではないかもしれないが、写字生がパピルス 46 番を作成した当初、何を意図してどのような計画があったか、そして、書写して行く最中、当初の計画をどのように変更していったか、たいへん興味がそそられる。ダフの議論は、「こうであったに違いない」という論法で必ずしも説得力はないかもしれない。しかし、パピルス 46 番というパウロ書簡集に当初から牧会書簡は収められていなかったという合意に一石投じる価値はあったが、残念ながら謎の究明には至っていない。

パピルス 47 番

チェスター・ピーティー図書館所蔵の聖書パピルス写本 3 番は、パピルス 47 番(83 頁・図 4)として知られる新約聖書最後の書、黙示録の写本である。黙示録の写本は、新約聖書 27 巻中で余り充実していない。パピルス 47 番が現存する古い写本の中でも比較的多くの箇所を収めた写本である。Nestle-Aland 28 版で、黙示録の本文研究の資料として一貫して利用されているパピルス写本は、七つである。そのうち 47 番と 115 番を除くと、みな小さな断片であるか、シナイ写本など 4 世紀以降の大文字写本よりも後の写本である³⁰。最近になって新約聖書の写本の一覧に加えられた 115 番は例外的で、47 番に匹敵する重要な写本である³¹。

パピルス 47 番は黙示録 9 章 10 節から 17 章 2 節までの写本で、10 葉 (20 頁)のみが現存するが、元来は黙示録全体の本文を収めた写本であったと思われる。本文部分の幅は、ほぼ 10cm である。すべての葉で上方が欠損しているので、正確な

ようとしていることには全く異論はない。ただダフの議論が沈黙に基づく議論で、十分な根拠に乏しいと思っているだけである。

30 具体的にはパピルス 18 番、24 番、43 番、47 番、85 番、98 番、115 番である。作成年代は、18 番が 3～4 世紀、24 番が 4 世紀、43 番が 6～7 世紀、47 番が 3 世紀、85 番が 4～5 世紀、98 番が 2 世紀、115 番が 3～4 世紀である。

31 1993 年出版の Nestle-Aland 27 版では、利用されているパピルス写本は 98 番までであるが、2012 年出版の 28 版では 127 番までが含まれている。新約聖書写本のパピルス 115 番は、オクシュルンクスパピルス 4499 番のことで、本文は 1999 年に公にされた (N. Gonis, J. Chapa, W.E.H. Cockle, D. Obbink, P. J. Parsons, and J.D. Thomas (eds.), *The Oxyrhynchus Papyri LXVI* [London: Egypt Exploration Society, 1999], 10-35)。D. C. Parker, "A New Oxyrhynchus Papyrus of Revelation," *New Testament Studies* 46 (2000), 159-74 や L. H. Blumell and T. A. Wayment (eds.), *Christian Oxyrhynchus: Texts, Documents, and Sources* (Waco: Baylor University Press, 2015), 142-60 などを参照のこと。

高さは不詳であるが、20cm前後であったと思われる。パピルス紙そのものの大きさは、仮に欄外余白を上下左右2cmずつあったと想定すると1頁分で14cm×24cm程度と想定できる³²。最初の5葉はパピルスの繊維が縦・横・縦・横(↓→↓→)という並びで、6葉からのパピルスの繊維の方向は横・縦・横・縦(→↓→↓)という順序に並んでいる。頁数は、欠損部分に記載されていたためか見当たらない。2葉が繋がった状態のものは見つかっていない。限られた情報しかないので、断言は差し控えなければならないが、普通に考えれば、パピルス46番と同じように、「単一綴じ(single-quire)コーデックス」であったと思われる。パピルス47番に収められている本文が、ちょうど黙示録を三分割した真ん中の部分にあたることから、黙示録全体を冒頭と真ん中と最後に三分割して各々が10葉(20頁)前後で単一に綴じられ、その三つを合わせて黙示録全体の合本を構成していた可能性も考えられる³³。仮にそうであったと想定すると、三つの合本の綴じ目が破損してバラバラになったもののうち真ん中の部分が残った、と説得力のある説明をしやすい。合本であったということは、あくまでも可能性であって、積極的に支持する根拠も、否定する根拠も今のところ見当たらない。パピルス47番もパピルスで出来た巻物を裁断してコーデックスを作成したようで、パピルス47番を構成する10葉のすべての葉にパピルスとパピルスとを繋ぎ合わせたと思しき繋ぎ目を認めることができる。

1頁当たりの現存する行数は、25行前後(+欠損部分の行)であるが、3葉表では、他の頁に比べて、なぜか文字が心持ち大きめで、そのためか21行(+欠損部分の行)しか数えられない。パピルス47番の写字生の字体は、太字で、大きめ、大雑把で少し読みにくく感じる。ユブシロンの底が丸くなく、尖っているのが、ニューと勘違いしやすい。ただしパピルス47番のニューは、ローマ字の大文字のエヌとほぼ同じ形態なので、見分けること自体には支障なく、慣れれば問題はない。それから、エーターは左右が対称ではなく、カッパーと見間違えかねない。イオータは縦に、特に下方に長く飛び出している。太めの筆致で、稚拙な印象を受ける。たびたびインクを付け直したためか、擦れてインクが薄くなったためか判断し兼ねるが、

32 ターナーのパピルス本の分類では、グループ7に分類されている(Turner, *The Typology*, 19)。ケニオンは9.5インチ×5.5インチと推測している(*The Chester Beatty Biblical Papyri III*, xi)。

33 Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri III*, xi. これは“quiniones”と呼ぶ(Turner, *The Typology*, 63-64)。

インクの濃淡が顕著で目立っている³⁴。

アクセント記号、氣息符、句読点の類はなく、文と文を区切る余白もない。語内で子音が続く場合に、2つの子音の間にアポストロフィーのようなコンマが見出される。例えば、 $\lambda\Gamma\epsilon\lambda\omicron\varsigma$ ³⁵, $\epsilon\kappa\prime\pi\omicron\rho\epsilon\upsilon\epsilon\tau\alpha\iota$ ³⁶, $\beta\lambda\tau\prime\tau\omega\upsilon\varsigma$ ³⁷ などである。語頭のユプシロンとイオータには通常、ドイツ語のウムラウトのような分音記号 (diaeresis) が上部に付け加えられている。通常のノミナ・サクラ (「聖名略記」) 以外に、「霊/息」($\pi\pi\lambda\bar{=}\pi\pi\epsilon\upsilon\mu\lambda/\pi\pi\epsilon\upsilon\mu\lambda\tau\lambda$ ³⁸) やスタウログラム (十字架に関連する語 $\epsilon\epsilon\sigma\tau\prime\pi\omega\bar{=}\epsilon\sigma\tau\lambda\gamma\prime\pi\omega\theta\eta$ ³⁹) や「人間」($\lambda\bar{\theta}\eta\bar{=}\lambda\eta\theta\epsilon\omega\pi\omega\upsilon\varsigma$ ⁴⁰) も略記されている。数字は、すべてギリシア文字で表記され、上方に横線が引かれていた。黙示録では、数字が頻出するので、各頁にいくつか上に横線を引いたギリシア文字があって、見慣れるまでは不可解にさえ見える。そして、3葉表の8行目の $\tau\omicron\upsilon\varsigma$ と10行目の $\theta\epsilon\omega\pi\rho\omicron\upsilon\eta\tau\lambda\varsigma$ の語末のシグマが、前の文字の上に小さめに書き記されている。これは行の右端部分なので、欄外余白を十分に残すための工夫かもしれない。

パピルス 47 番には訂正された箇所が余り多くないが、写字生が書きしながら (in scribendo) 訂正したと思われる箇所が十箇所ある⁴¹。1葉裏の12行目で写字生は $\epsilon\chi\omega\upsilon\varsigma$ のエプシロンを書いてから、冠詞のオミクロンを抜かしたことに気が付い

34 “The writing is rather rough in character, thick in formation, and with no pretensions to calligraphy. The letters are upright and of medium size, and simple and unexaggerated in style. They are certainly more Roman than Byzantine in character. λ , ϵ and ς are simple in form, λ being formed of an open angle crossed by a slightly curved diagonal stroke, while ϵ leans slightly forward, and ς has a nearly flat top. β is a trifle large, but not markedly so. ξ is formed continuously. μ and ω are well rounded, and the former has only a short tail. There is nothing in the hand to suggest a later date than the third century, but it is likely to be late in the century.” (Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri III*, xii).

35 1葉裏4行、12行、16行、1葉表22行、2葉裏12行、21行など多数。

36 3葉裏2行。

37 1葉裏5行。因みに、パピルス47番にのみ見出される独自の読みである(9:11)。

38 3葉表7行、6葉裏下から3行、10葉表16行、17行。

39 3葉裏20行。

40 1葉裏19行、1葉表4行、11行など。

41 James Royse, *Scribal Habits*, 365–67. なぜかケニオンは、ほとんど指摘していない (Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri III*)。

て、エプシロンをオミクロンに訂正してから、**εχων** を書いている (9:14)。そのためにオミクロンは、濃く書かれている。2葉裏、下から7行目の **χρονος** のキー (**χ**) は、カッパーと書いたのをキーに訂正している痕跡が見て取れる (10:6)。2葉表、8行目の **βιβλιδιον** は、写字生は初め **βιβλιον** と書こうとして、ニューを書いている最中に間違いに気付いてオミクロンをデルタに、ニューをイオータとオミクロンに書き換えたようである (10:10) が、いくつかの異読が見出される箇所である⁴² ので、パピルス 47 番の写字生の手許にあった底本にはどのような読みが見出されていたか定かではない。

2葉の表、下から2行目にミューとベーターが書かれて、その上に横棒が記載されている (11:2)。ところが、良く見ると濃く書かれたミューの背後に薄くシグマを認めることができる。シグマを、ミューに訂正したに違いない。なぜパピルス 47 番の写字生は、ミューを書かなければならないところに間違えてシグマを書いたのであろうか。ギリシア文字で数字表記すると、ミューは 40、ベーターは 2 で、シグマは 200 である。底本に **μηνας τεσσαρακοντα [καί] δυο** とギリシア文字表記ではなく、ギリシア語の数詞を用いて「42ヶ月」と書いてあるのを見て書写しようとしたが、1つのシグマから別のシグマに (**μηνας τεσσαρακοντα [καί] δυο**) 目が跳んでしまったので、その続き **τεσσαρακοντα** を書こうとした。ところが、シグマを書いた途端に自らの間違いに気が付いたので、即座にシグマを消して、その上にミューを書いたのではないかとジェームズ・ロイズは提案している⁴³。

3葉の裏、12行目の行の右端に **λυτων** と書こうとしたものの、**λυτ** と書いた時点で、この単語を区切る場所について気が変わり、タウを消して、次の行の左端から **των** と書き改めている (11:7)。3葉の表、4行目に写字生は初めに **λυτους** と書いたが、気が変わって語頭の二文字アルファとエプシロンを消している (11:10)。動詞 **εβαλανισαν** の目的語として男性複数対格の人称代名詞の代わりに、冠詞を伴う、名詞的用法の分詞 (**κατοικοιουντας**) に変更している。5葉表、16行目で写字生は聞き違えたためか **την** と記した⁴⁴ が、間違いに気

42 Nestle-Aland 28 の本文を巡る脚注の記載は「βιβλιον p^{47*}vid s 046. 1854 π^k lat ; βιβλιδιον p^{47c} ; βιβλιδαριον 1006. 1611. 1841. 2053 ; βιβλαριον 2329 ; txt A C P 2344. 2351 π^A」となっている。

43 James Royse, *Scribal Habits*, 366.

44 写字生は黒く塗りつぶして消しているため、消した文字がどの文字であったか判別できない。

が付いてニューを消して、少し上方にガンマを書いて ΤΗΓΥΝΛΙΚΙ に変更している (12:16)。6葉の表、15行目で写字生は、当初 εΔΟΗΛ と書いてしまったようであるが、シーターを跳ばして抜かしたことに気が付き、エーターの上からシーターを濃く書いて、アルファーの上からエーターを書いて εΔΟΘΗ に訂正している (13:5)。7葉裏、一番下の行で写字生は ΘΥ と書いてから、目が前に戻ってしまい (ΟΙΝΟΥΤΟΥΘΥΜΟΥΤΟΥΘΥΤΟΥ = οἴνου τοῦ θυμοῦ τοῦ θεοῦ τοῦ)、もう一度 ΜΟΥ と書くところ、ミューを書いた時点で間違いに気が付いてミューを消して、少し上方にタウを書いて、続けている (14:10)。10葉表、下から7行目の右端に ΛΥΤ を書いた時点で、次の行に移る場所について気が変わり、タウを消して、タウから次の行を始めている (16:14)。

パピルス 47 番に見出される訂正で重要なものがいくつかある。1葉表16行目に見出される訂正は興味深い (9:20)。ΧΑΛΚΛ と書き記されているところでカッパーとアルファーの間上方に小さめにエプシロンが加えられている。新約聖書時代以降のギリシア語であれば、χαλκεα は約音して χαλκᾱ と表記することの方が一般的であった。直前の2つの語 (χρυσᾱ, ἀργυρᾱ) も約音する前の綴り (ΧΡΥΣΕΛ, ΑΡΓΥΡΕΛ) が用いられているのに合わせて、この語も約音する前の綴りに「訂正」されている。

2葉裏の6行目と8行目と11行目に数字の「7」が見当たらない。なぜか6行目と8行目では訂正された痕跡はないが、11行目ではギリシア文字で数字の7を意味するゼーターが、「雷 (ΒΡΟΝΤΑΙ)」の冠詞 (ΛΙ) のイオータの上に書き込まれている (10:4)。この箇所では数字の「7」は多くの写本に見出されている⁴⁵。

パピルス 47 番の写字生は「訂正」しているように思われるが、「訂正」前の読みも「訂正」後の読みも、それぞれ写本の支持がある読みである箇所が3つある。「訂正」前の読みも「訂正」後の読みも、写本の支持があるということは、写字生が書写する際に間違えたというよりも、底本と別の写本を参考にして、「訂正」(変更)した可能性が示唆される⁴⁶。

先ず、7葉表1行目は欠損部分があるので、判断が難しいが、写字生は初め ΧΑΡ[Λ]ΓΜΛΤΛ と書いてから、語尾の ΤΛ を消しているように見える (13:16)。つまり、初めに書写した際には複数形を書いたが、それを単数形に変更している。単数形の読みの方が大勢で Nestle-Aland の本文にも採用されているが、複数形を支

45 パピルス 47 番では、この箇所には他にも異読が見出される。

46 James Royse, *Scribal Habits*, 368-69.

持する写本もある⁴⁷。

9葉表、3行目に写字生は $\mu\omega\sigma\epsilon\omega\sigma$ と書いているが、前の方のオメガとシグマの間、少し上方にユプシロンを書き込んで訂正している (15:3)。モーセの名前のギリシア語表記には、ユプシロンが入る綴りと入らない綴りの両方があるので、両方の綴りについて、それぞれを支持する写本の存在を想定するまでもないかもしれない。

10葉表、5行目に写字生は、最初 $\epsilon\beta\lambda\lambda\alpha\sigma\phi\eta\mu\eta\sigma\alpha\lambda\eta\sigma$ と書いているが、その後、エーターとシグマとアルファを消している。そして、少し上方にオミクロンとユプシロンを書いている。言い換えると、当初はアオリスト時制の動詞が書かれていたが、その動詞の時制を未完了 ($\epsilon\beta\lambda\lambda\alpha\sigma\phi\eta\mu\omicron\upsilon\gamma\eta\sigma$) に訂正したことになる (16:11)⁴⁸。

4葉裏、12行目に写字生は、初め $\epsilon\upsilon\chi\alpha\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon\mu\epsilon\sigma\iota\omicron\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ ($\epsilon\upsilon\chi\alpha\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon\mu\epsilon\sigma\iota\ \omicron\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma$) と書いたようであるが、シーターをカップーに変えて $\omicron\kappa\tau$ に訂正している⁴⁹。通常は呼格の「主 ($\kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$)」⁵⁰ が用いられる箇所なので、パピルス 47 番の写字生は、ひとつの珍しい読みを別の珍しい読みに変更したことになる。その上、 $\omicron\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ を繰り返した結果、パピルス 47 番の本文は次のようになっている (11:17)。

$\epsilon\upsilon\chi\alpha\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon\mu\epsilon\sigma\iota\omicron\kappa\bar{\omicron}\bar{\tau}\bar{\omicron}\bar{\theta}\bar{\epsilon}\bar{\sigma}\bar{\omicron}\bar{\theta}\bar{\sigma}\bar{\omicron}\bar{\rho}\bar{\alpha}\bar{\nu}\bar{\tau}\bar{o}\bar{\kappa}\bar{\rho}\bar{\alpha}\bar{\tau}\bar{\omega}\bar{\rho}$
 $\epsilon\upsilon\chi\alpha\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon\mu\epsilon\sigma\iota\ \omicron\ \kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\omicron\varsigma\ \omicron\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma\ \omicron\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma\ \omicron\ \rho\alpha\nu\tau\omicron\kappa\rho\acute{\alpha}\tau\omega\rho$
 私たちはあなたに感謝します。神、主よ、全能なる神よ。

チェスター・ビーティー新約聖書写本

前述した通りにチェスター・ビーティー図書館には、12の聖書パピルス写本が所蔵されているが、そのうち1番と2番と3番が、初期の新約聖書の写本として有名なパピルス45番と46番と47番である。そして、パピルス46番の場合は、ミシガン大学と分割して所蔵されている。以上3つのパピルス写本は、考古学者た

47 Nestle–Aland 28の本文を巡る脚注には、複数形を支持する写本として $\mathfrak{p}^{47*} 046. 051. 2351. 2377 \mathfrak{m}^k \text{sa}$ が列挙されている。

48 Nestle–Aland 28の本文を巡る脚注には、未完了時制形を支持する写本として $\mathfrak{p}^{47e} \text{gig sa bo}^{\text{ms}}$ が挙げられている。

49 冠詞付きの主格名詞が呼格として用いられる用例は新約聖書にある (例えば、マルコ福音書 14:36; ローマ人への手紙 8:15; ガラテヤ人への手紙 4:6)。

50 ノミナ・サクラとして略記するならば、 $\kappa\epsilon$ である。

ちが発掘したものではなく、地元の業者から購入されたものであるので、出処の詳細は定かではないが、ファユムかアトフィー（古代のアフロディトポリス）近辺の修道院か教会の廃墟で発見されたと伝えられている⁵¹。もちろん、出土場所と写本が作成された場所とは必ずしも同じとは限らない。しかし、修道院か教会の廃墟から出土した写本である、ということは、そこで使用されていた可能性が十分に考えられる。

通常の見解では、3つのパピルス写本のうちパピルス 46 番が一番古い。パピルス 46 番を解読して編集・出版したケニヨンとサンダースは共に 3 世紀のパピルス写本であると明記した⁵² こともあり、多少の幅があるとしても 3 世紀作成の写本であるとはほぼ合意されてきた⁵³。昨今は紀元 1 世紀など極端に早い年代を主張する学者⁵⁴ も現れ、紀元 200 年⁵⁵ など意見が百出している観がある⁵⁶。写本の作成年代は、

-
- 51 Philip Comfort and David P. Barrett (ed.), *The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts* (Wheaton: Tyndale House Publishers, 2001), 157.
- 52 Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri III*, ix; Henry A. Sanders, *A Third-Century Papyrus Codex of the Epistle of Paul* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1935), 12-15.
- 53 Turner, *The Typology*, 20; E. B. Ebojo, *A Scribe and His Manuscript*, 138-48. 新約聖書本文批評の教科書的な書籍 (Kurt Aland and Barbara Aland, Erroll F. Rhodes trans. *The Text of the New Testament: An Introduction to the Critical Editions and to the Theory and Practice of Modern Textual Criticism* [2nd ed.; Grand Rapids: Wm. Eerdmans, 1989], 87, 99; Bruce M. Metzger and Bart D. Ehrman, *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption, and Restoration* [4th ed.; Oxford: Oxford University Press, 2005], 54; David C. Parker, *An Introduction to the New Testament Manuscripts and Their Texts* [Cambridge: Cambridge University Press, 2008], 252) ではパピルス 46 番は 3 世紀のパピルス写本として紹介されている。
- 54 Young Kyu Kim, "Palaeographical Dating of P46 to the Later First Century," *Biblica* 69 (1988), 248-57.
- 55 Gunther Zuntz, *The Text of the Epistles: A Disquisition upon the Corpus Paulinum* (The Schweich Lectures of the British Academy, 1946. repr. ed. of the British Academy, 1953; Eugene: Wipf & Stock, 2007), 11.
- 56 パピルス 46 番の年代決定を巡る博士論文として、Min Seok Jang, *A Reconsideration of the Date of Papyrus 46* (unpublished dissertation of New Orleans Baptist Theological Seminary, 2010) があるが、写本の年代決定に関する先行研究を批判的に概観し、年代決定を巡る諸問題も批判的に取り扱って、パピルス 46 番の年代として紀元 75 年から 200 年と結論付けている。カンフォートは 2 世紀半ば、と結論する (*Encountering the Manuscripts* [Nashville: Broadman & Holman Publishers, 2005])。

古文書学 (palaeography) 的に決定されるものである。写本の形態の構造や出土状況など考慮されなければならない点は多々あるが、やはり決定的なのは、写本に見出される字体を比較検討した結果である⁵⁷。一言で、非常に微妙で困難で専門的な判断が伴う作業であるので、慎重を期さなければならない⁵⁸。

幸いなことに、本稿の調査報告のためには、厳密で正確な作成年代は必要ない。むしろ、パピルス 45 番と 46 番と 47 番の 3 つの写本が、ほぼ 1 世紀の期間に作成されたことについて専門家たちの間で意見が一致していることが、本稿で報告する調査では重要である。例えば、ケニヨン⁵⁹は、パピルス 46 番を 3 世紀の前半、45 番を 3 世紀前半、47 番を 3 世紀遅めに設定している。フィリップ・カンフォートは 46 番を 2 世紀の半ば、遅くとも 175 年頃までとし、45 番を 200 年頃、そして 47 番を 3 世紀半ばと推定している⁵⁹。さらに、ジェームズ・ロイズは、46 番を 200 年頃、45 番を 3 世紀作成、47 番を 3 世紀後半作成とそれぞれ想定している⁶⁰。

出土場所が同じで、作成年代が大きく変わらない 3 つのパピルス写本の間に、大きさやコーデックスの構造や字体などで大きな相違があることが今回の実見調査で確認できた。出土場所が同じでも、字体が異なることから、写字生が違うことはわかるが、あるいは作成場所も異なった可能性も考えられる。3 つの写本相互では書写して収められている書は異なる。パピルス 45 番は、四福音書と使徒の働き、そして 46 番はパウロ書簡、最後 47 番は黙示録が収められている。しかし、3 つの写本が出土した場所が、教会か修道院の廃墟であったことから、同じ人たちが 3 つの写本を所有して利用していたことが想定できる。ただ、それぞれの写本によって用途が異なっていたかもしれない。礼拝などでの朗読用と個人での瞑想など用途によって写本の大きさや字体が異なった可能性は十分に考えられる。

3 つの写本とも、完璧な状態で見出された頁はないので、どのように欠損部分を補うかで、想定される本来のパピルス写本の大きさも変わってくるので、不確かな

57 その場合に、基準となるのは、作成年月日が明記されている文書の字体であり、時代と共に写字生の字体は変遷したという前提が想定されている。Bruce M. Metzger, *Manuscripts of the Greek Bible: An Introduction to Palaeography* (Oxford: Oxford University Press, 1981), 49-51; Philip Comfort, *Encountering the Manuscripts*, 103-20 など参照のこと。

58 Brent Nongbri, "The Use and Abuse of P52: Papyrological Pitfalls in the Dating the Fourth Gospel," *Harvard Theological Review* 98 (2005), 23-48; Don Barker, "The Dating of New Testament Papyri," *New Testament Studies* 57 (2011), 571-82.

59 Comfort, *Encountering the Manuscripts*, 131-39, 172-77.

60 Roysse, *Scribal Habits*, 103, 199, 359.

面はある。パピルス 45 番の大きさは、1 頁（あるいは 1 葉）あたり、ほぼ横 20cm × 縦 25cm であったと思われる。パピルス 46 番の大きさは、同じように 1 頁あたり横 15-16cm × 縦 20-28cm であったと思われる。46 番の場合には、単一綴じのコーデックスであったので、最初か最後の方と真ん中あたりの頁かで大きさ、特に横幅は異なっていたことは確認できている。パピルス 47 番は、1 頁あたり横 14cm × 縦 24cm の大きさであった。写本によって縦横のバランスが異なっていたことがわかる。

3 つとも、コーデックスであったが、45 番は二頁分の大きさのパピルス紙をそれぞれ先ず二つ折りにしたものを、50 枚ほど重ねて綴じて作成したコーデックスであった。46 番は、二頁分の大きさのパピルス紙を、表を上にして 50 枚程度重ねたものを、全パピルス紙を一緒に二つ折りして綴じたコーデックスであった。47 番は、二頁分の大きさのパピルス紙を 10 枚、先ず重ねて、そして二つ折りして綴じたコーデックスであったと思われる。あるいは、10 枚（20 頁）で綴じたものを 3 つ合本して、黙示録全体を収めた一巻に仕上げたかもしれない。この点について判断する材料はなく、確かなことはわからない。

3 つのパピルス写本の間で一番大きな相違は、字体である。46 番の字体が一番達筆で、見た目の美しさにも気を配った字体であり、余裕があって見やすいレイアウトになっている。それに対して、47 番の字体は、素人のように素朴で大胆である。読めない字体ではないが、決して読みやすい字体ではない。45 番の字体は、それほど見た目の美しさに注意を払っていないかもしれないが、行間も詰めて文字と文字との間も詰めて、均等で小さめの字を書き連ねているので、確かな腕の持ち主の字体であることは間違いないと思われる。四福音書と使徒の働きを一冊のコーデックスに収めることができる腕があったことは証しされている。

字体の他に、訂正が写字生の資質を知る重要な情報となる。特に、書写しながら写字生自らが訂正している箇所については、写字生の資質の確かさを確認することができる。パピルス 45 番の写字生は、余り評判が良くない写字生であるが、字体だけではなく、書写しながら自ら訂正している箇所があることから、写字生としてそこそこの資質があったことは確認できる。また、パピルス 47 番の写字生は、字体からは素人のようにも思われるが、書写しながら訂正している箇所があることから、信頼できない全くの素人ではなさそうである。

さらに、パピルス 45 番と 46 番には、頁数が書き込まれていたことは興味深いことである。写字生自らが頁数を書き込むこともあったが、通常は、写字生の仕事

を監督する立場にある者が本文を確認しながら、頁数を書き込んだようである。そして、パピルス 46 番の場合には、頁数の字体は、明らかに本文の字体とは異なっている。そして、各書の巻末に行数も記入されている⁶¹。パピルス 45 番では確認できなかったが、パピルス 46 番と 47 番の場合には、底本とは異なる写本を参考にして訂正したと思われる箇所が確認できた。写字室があったと言うと少々大袈裟かもしれないが、写生字たちが写本を作成する際に、底本が一冊あっただけではなく、複数の写本があり、しかも監督したり、書写の確認をしたりするような、後の写字室の端緒の存在を想定することができる。

同じ場所から出土したと思われる 3 つのパピルスのコーデックスの構造や大きさや字体が統一していないと思われることに、何が示唆されているのであろうか。サンプルとして 3 つしかないので、早急に結論を下すべきではないかもしれない。しかし、新約聖書を構成する（あるいは、構成するようになる）書物の形態や字体や構造について、この時点（3 世紀か）ではまだ統一規格が定められていなかった、ということは想定できて興味深い。

61 ただし、頁数の記入漏れがあったり、行数が間違っていたり、余り信頼できる監督官ではなかったかもしれない。

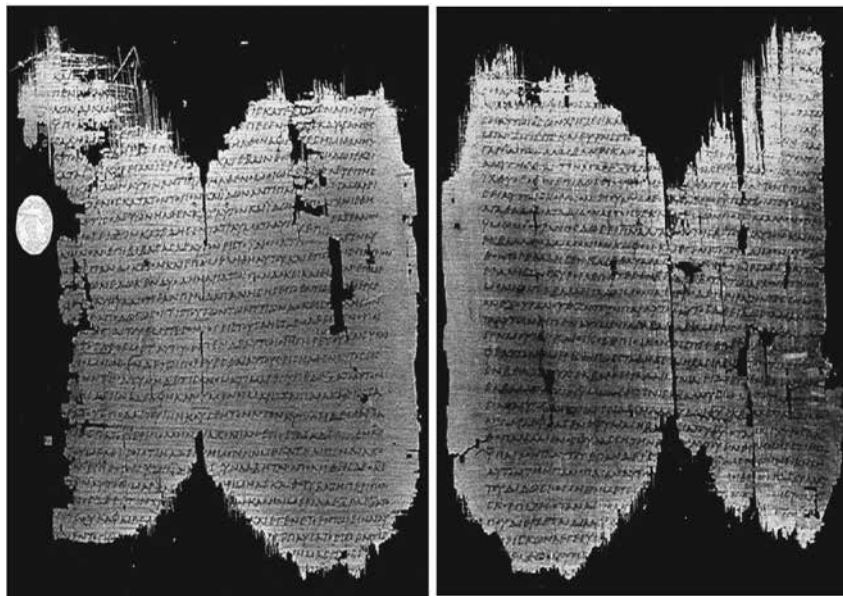


図1 パピルス45番11葉と12葉の表

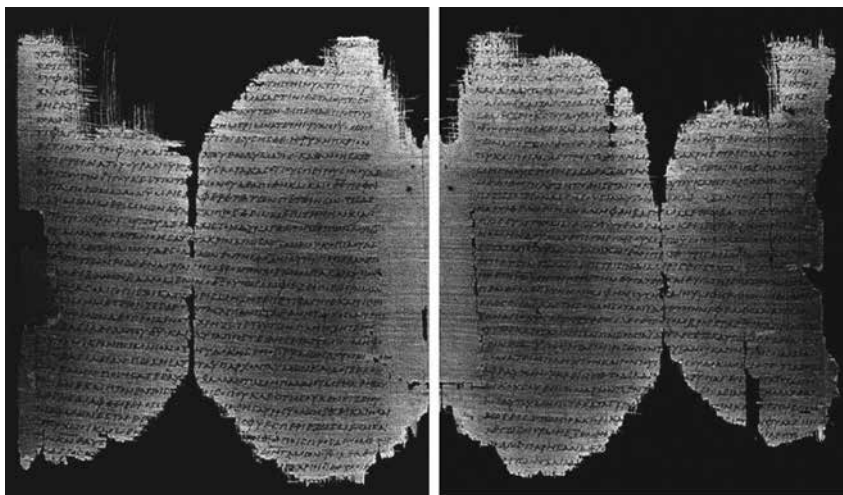


図2 パピルス45番13葉と14葉の表



図3 パピルス46番15葉表と90葉表



図4 パピルス47番5葉表と6葉表